

【書評】

英語教師のための基本文献案内(3)

加 島 巧・藤 内 則 光
川 島 浩 勝・江 村 理 奈

The Selected Bibliographical Guide for Teachers of English (3)

KASHIMA Takumi, FUJIUCHI Norimitsu
KAWASHIMA Hirokatsu, EMURA Rina

Abstract

In what follows we offer a bibliographical guide of four basic books for teachers of English. The first book was selected from Old English Literature, and the second one belongs to the English grammar. The third one was chosen from English-language pedagogy. The last one belongs to psychology.

1. 『中世イギリス英雄叙事詩 ベーオウルフ』 KASHIMA Takumi
2. 『Syntactic Structures』 FUJIUCHI Norimitsu
3. 『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』 KAWASHIMA Hirokatsu
4. 『絶対役立つ教育心理学—実践の理論、理論を实践—』 EMURA Rina

序

今年も2014年度に、現代英語学科で教職課程の科目に関わりを持つ4名の教員が、将来教師を目指す学生や、現役の英語教師にとって有益な書物を一点ずつ紹介することとする。初めの本は英語・英文学の領域から、そして2冊目は文法の領域から選んだ。3冊目は英語教育の分野から、そして最後は心理学の分野から選び、解題を施した。いずれの本も英語教師にとっては有益な書物であると考えている。

1. 忍足欣四郎（訳）『中世イギリス英雄叙事詩 ベーオウルフ』

岩波文庫 ISBN4-00-322751-4 p.343

古英語（450A.D. - 1100A.D.）を代表する文学作品と言えば、ベオウルフであろう。3182行の英雄叙事詩である。大英図書館に所蔵されている現存する最古の写本は二つの写本を合わせた物で、前半は12世紀に、後半部分は10世に写されたものと言われている。物語の舞台は、ユトランド半島周辺である。ここは英語を449年にブリテン島にもたらしたアングル人、サクソン人、ジュート人、そしてフリジア人たちが住んでいた地域でもある。

ベオウルフは2部構成になっている。

第一部 （1行～2199行）

デネ族の王フロースガールは、豪華な宮殿を作ろうと考えた。宮殿は無事完成し、ヘオロットと名

付けられ、そこでは祝いの祝宴が連日催されるが、そこをグレンデルという巨人が襲う。それから12年が過ぎ、イェーアト族のベオウルフが救援に向かい、巨人を退治する。その夜、グレンデルの母親が息子の復讐にやってくる。ベオウルフは再度怪物退治に出かける。激しい戦いでベオウルフは怪物を退治し、帰国する。

第二部 (2200行～3182行)

ベオウルフが王となって五十年が過ぎた。宝を納めた塚があり、そこは竜が番をしていた。その塚を荒らした者がおり、それに怒った火を吹く竜が人里を襲い始める。ベオウルフは11名の従者と竜退治に出かける。竜を倒しはするが、ベオウルフも傷を負い死ぬ。ベオウルフは自分の遺体を岬に塚を作り葬るように命ずる。後世まで国民がベオウルフのことを思い出すように。

ここで古英語の時代の特徴を二つ挙げることにする。頭韻とケニングである。

1. 頭韻 (alliteration)

同一の子音（子音群・時には異音や母音）が近接して強勢を受ける音節で反復される頭韻は古英語の詩の特徴である。ベオウルフでもこの伝統が随所に見られる。一行目では異音の頭韻が見られる。

2. ケニング (kenning)

代称とも呼ばれるケニングも古英語詩の特徴で、次に示すように複合語で表す隠喩的な婉曲表現である。

鯨の路＝海

波上の放浪者＝船

白鳥の路＝海

ひかる鉄環＝鎖帷子

輝かしい神の灯火＝太陽

殺人の訪問者＝悪鬼

命の別れ＝死

天空のろうそくの灯火＝太陽

天の喜びを楽しげにつげる時＝朝

戦いの友＝剣

海の衣＝帆

海に浮くもの＝船

天の宝石＝太陽

戦いの仮面＝かぶと

喜びを生み出す木片＝楽器

夜の略奪者＝竜

宝の守り主＝竜

神の栄光＝死の道

正義の人々のための栄光＝審判

(この項目は大場啓蔵訳『新口語訳 ベオウルフ』篠崎書林 昭和60年を参考にした。)

このケニングはシェイクスピア(1564-1616)も使用しているので一例挙げる。

Night's candles are burnt out. Shakespeare, *Romeo and Juliet*, III. v.9

夜のろうそくは燃え尽きた Night's candles = stars

中世のヨーロッパでは、ドラゴン伝説が広く受け入れられていた。ドイツの英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』では、竜を退治した際に返り血を浴びて全身が不死身の甲羅と化したジーフリクが描かれ（相良守男訳岩波文庫前編 p. 34）、新約聖書では「ヨハネの黙示録」に次のように描かれている。

「また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、火のように赤い大きな竜である。これには七つの頭と十本の角があって、その頭に七つの冠をかぶっていた。竜の尾は、天の星の三分の一を掃き寄せて、地上に投げつけた。」（新共同訳：12章 3、4 節）

「わたしはまた、一匹の獣が海の中から上って来るのを見た。これには十本の角と七つの頭があった。それらの角には十の王冠があり、頭には神を冒瀆するさまざまな名が記されていた。わたしが見たこの獣は、豹に似ており、足は熊の足のようで、口は獅子の口のようにであった。竜はこの獣に自分の力と王座と大きな権威とを与えた。」（新共同訳：13章 3 節）

7世紀からイングランドの北東海岸を荒らしたのがバイキングである。1154年までの記録が散文で綴られたアングロ・サクソン年代記の793年の項に次のように描かれている。

In this year terrible portents appeared in Northumbria, and miserably afflicted the inhabitants: these were exceptional flashes of lightning, and fiery dragons were seen flying in the air. A great famine soon followed these signs: and a little after that in the same year on 8 January the harrying of the heathen miserably destroyed God's church in Lidisfarne by rapine and slaughter. And Sigca passed away on 22 February. (G.N. Garmonsway: *The Anglo-Saxon Chronicle*, Everyman's Library No. 624)

この年に、ノーサンブリアの上空に、不吉な前兆が現れ、悲惨なほど、住民をおびえさせた。それは、巨大な稲妻の閃光であった。また、火を吹く龍が、空中に飛ぶのが見えた。これらの前兆に続いてすぐ、大飢饉がおこった。その後まもなく、その同じ年の1月8日に、異教徒が侵入し、略奪と殺戮によって、リンディスファルネの神の協会に、惨憺たる破壊をおこなった。また、2月22日には、シジャが死んだ。（大沢一雄著『アングロ・サクソン年代記研究』 nci p. 182）

最初は略奪行為を行ってはすぐに帰っていたバイキングだが、その後定住するようになり、南下を行う。Sussexの王アルフレッドが立ち向かう。アルフレッドは、878年にウエドモア条約をバイキングと結び、バイキングの南下は止まる。バイキングはキリスト教徒になり、土地を取得する。その結果生まれた地域がDanelawであった。その後二つの民族の交わりは進み、1016年にはCnutがイングランド王となり、二つの民族はそこまで交わったことになる。

このドラゴン伝説の伝統は現在でも引き継がれている。

『ハリー・ポッターと賢者の石』では、ロン・ウィーズリーの兄チャーリーがルーマニアでドラゴン研究を行っているがあり、領地の番人ルビウス・ハグリッドがノルウェー・リッジバック種のドラゴンの卵を孵している。ドラゴンの飼育は魔法界では1709年のワーロック法で飼育が禁じられているのだが、ノーバートと名付けられたこのドラゴンは結局、チャーリーに引き取られることになるのだが、第7巻『ハリー・ポッターと死の秘宝』(上)で、このドラゴンは雌であったことが明かされている。(ノベルタと呼ばれている。)第四巻『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』ではドラゴンの弱点は目であることが分かる。(シリウス・ブラックからの手紙によれば、「結膜炎の呪い」という魔術を使えば良いらしい。)

J.R.R.トールキン(1892-1973)は『ホビットの冒険』を1937年に書いた。火を吐く山の悪魔スマウグ(=竜)に奪われた領土と宝を取り戻そうとドワーフの王子トーリンは13名の仲間達と魔術師ガンダルフ、そしてホビットのビルボ・バギンズとエレボールを目指し旅に出る。色んな苦難を乗り越えたビルボは地下都市エレボールに一人入っていく。スマウグは背中を鉄の鱗で、腹を宝石と金で覆っていたので、どんな剣も貫くことが出来なかった。しかし左胸にあった隙間を矢で射貫かれ退治されることになる。(なんとベオウルフの第二部と構成が似ていることか！)

J.R.R.トールキンはオックスフォード大学のローリンソン・ボズワース記念アングロ・サクソン語教授を1925年から45年まで務め、その後59年までは同大学マートン学寮英語英文学教授を務めた人物である。1936年の講演“Beowulf, the Monsters and the Critics”は古英語文学研究に大きな影響を与えた。その彼が書いた『ホビットの冒険』や、その後に出した『指輪物語』が『ベオウルフ』と似ていても不思議では無い。

そのほかベオウルフに関して、本文中に引用したもの以外に次のものを参考にした。

刈部恒徳・小田良一(編)『古英語叙事詩 ベーオウルフ 対訳版』研究社 2007年

厨川文夫(訳)『ベーオウルフ』岩波文庫 昭和16年

ローズマリー・サトクリフ(著)井辻朱美(訳)『ベオウルフ』沖積舎 1990年

Klaeber Fr. *Beowulf and the Fight at Finnsburg* D.C. Heath and Company, 1950

2. Noam Chomsky “Syntactic Structures”

Mouton de Gruyter ISBN978-3-11-017279-9

1. 生成文法のオールドスクール

現在では政治学者としても知られるチョムスキーの Syntactic Structures (以下本書)は、俗にいうチョムスキー革命の狼煙を上げた歴史的な名著としての位置がすでに確立されている。現在チョムスキーの理論言語学は生成文法と呼ばれてはいるが、当時は変形操作がその特徴として捉えられており、名称も変形生成文法が通り名であった。その理論は、チョムスキーの師匠のハリスの影響による構造主義言語学、父親の研究からの影響による現在ヘブライ語の形態音素論、チョムスキー自身の興味である数理言語学、数学、デカルトの哲学の影響を受け、伝統的科学文法のように言語を正確に記述することを目指す、かつ正確に説明することをも目指し、構造主義言語学のように厳密に分析す

ることを目指すが、それ以上に言語のレベルの独立と相互依存の定義が進んでいる。

1957年に出版された本書は、生成文法の初期理論を紹介するものではあるが、執筆の順番では1955年の *The Logical Structure of Linguistic Theory* と1956年の *Three Models for the Description of Language* が先行し、前者にはチョムスキー自身が序論を付け加え1975年に出版されている。1965年出版の *Aspects of the Theory of Syntax* からが一般的に標準理論として知られる体系であると認識される中での出版の前後は、学習者に若干の戸惑いを与えるかもしれない。その場合は、Chomsky (1975) の序論もまた同時に研究することを勧める。岩波書店より文庫として出ている『統辞構造論』(ISBN 978-4-00-336951-7) が、チョムスキー研究者の福井直樹氏による両者の訳を含んでいるので、原書以外の参考書として良いものである。

2. チョムスキー革命

チョムスキー自身がベトナム反戦運動で数回検挙された経験があるとしても、チョムスキー革命とは別に政治的な革命を表すものではない。生成文法自身が革命的な文法理論ではあるのだが、本書を読む限りの範囲で、少ない文字数でその革命が何であったのかを解説すると、概要以下のようなものとなるであろう。

文法の独自性

実は解釈に慎重さを要するが、チョムスキーは言語 L の文法は L の全ての文法的連鎖を生成し、非文法的な連鎖を生成することがない装置であると述べている。この主張と文法の独自性を合わせて考えると、話者の持つ他の特性ではなく文法が言語を紡ぎだすという主張となるが、チョムスキー自身が装置の述べた非人間的な物が言語を紡ぎだすとは果たしてどういうことか、生成文法に抵抗感が生まれるのはこの「言語を生み出すのは人間かそれとも文法か」的な発想が発端となる。

ここで述べられているのは、文法とはあたかも装置のような緻密さを持ち、しかしながら他の特質とは切り離して別個に考えることが出来るものであるということである。ここでいう文法が、母語について話者が知っている全ての知識であり、もしくは人間が生得的に持つところの特定言語の文法を導き出す言語知識・普遍文法であるという主張は、ここではなく後続する文献で読むことが出来る。つまり、前述の疑問への正解は、言語を生み出すのは文法に力を借りた人間である、となる。

また、ここでは文法の検証方法として母語話者の容認可能性に訴えるが、解釈可能性という意味基準と統計的基準を廃し、形式的適格性を対象としているのも革命的な発想である。有名な *Colorless green ideas sleep furiously*. という例文は、ここを含めて初期の研究で登場する。それに加え、言語記述を与えて構造的な適格であると判定するための、装置のような緻密さを持つブラックボックスを有限状態マルコフ過程として記述することができない、つまり言語は有限状態ではないことを指摘しているのもここでの大きな成果である。これらの主張は、言語の使用と解釈という人間の行動の記述であるところに限界があった伝統的科学文法の観点を超えるものであるが、間違いなく前提としてその観点を必要としているものでもあった。

言語の表示レベル

ここでいう言語の表示レベルとは、言語を音素列で表すのではなく、それよりも高度な形態素のレ

ベルで表示するような種類の表示レベルである。言語の文法にとって最も望ましいのはそれが有限であることであるが、上記のように言語が有限状態ではないことは、形態素列の組み合わせもまた有限ではないことに繋がり、当時知られていた他のいかなる文法を用いてもそれを記述することは出来なかった。そもそも構造主義言語的な表示レベルの区別は、形態素のレベルが存在するためには音素のレベルが前提となり、結果として形態素以上のレベルが明確に独立することは出来ないことは既知の問題である。チョムスキーは、構造主義言語学の直接構成素分析のような、レベルの有限集合を見つけ出すことは不可能であると述べている。

文法として必要な有限性と、結果がもたらす非有限性を同時に記述することが出来るものが、有限個の句構造規則を循環適用することであり、それでも限界がある部分を変形によって派生する、生成文法の初期から標準理論までの枠組みである。その際、構造主義言語学が記述しようとしていたレベルは、初期連鎖から終末連鎖までの派生と音声形式に翻訳されている。

生成文法が非有限状態の記述に取り組めたのも、構造主義言語学の通過してきた記述のレベルが前提となっており、現在最新の理論である極小主義が目指す表示レベルの最小化と文法理論の単純化も、この段階を正しく研究しなければ極小主義独特の記述の方法を習得するに留まるであろう。

したがって、もし生成文法を過去の理論の合(Synthesis)と考えるのであれば、それに対する正(Thesis)は伝統的科学文法、その反(Antithesis)は構造主義言語学であると主張することは十分に妥当である。それ故に、これらの研究を正しく修めることが生成文法の研究者の使命であり、それらの研究を抜きにしては、言語理論の研究を追従することは出来ても、記述対象の言語の本質への理解は深まらないものと考ええる。

3. 本書の特徴

本書が解説しているのは、後に生成文法として知られる言語理論のあるべき姿の他には、生成文法の初期理論として知られている文法規則である。本学教職課程の学生は授業中に標準理論を学習しており、現在現役の英語教員も学生時代には標準理論を学習したと推測するが、初期理論は標準理論とは以下の点が異なり、かえって標準理論の知識を使って理解を試みると、誤解する可能性がある。

句構造規則

本書では、Sentence→NP+VP という見慣れた句構造規則が(13)(i)として紹介されている。まず始発記号としてのSは定義されてなく、NPやVPはそれが名詞句や動詞句であることが前提であるかのように書かれているが、それらは範疇としては定義されていない。さらに(13)(ii)NP→T+Nでは、Tという今ではその意味では使われていない記号が用いられている。ここで句構造は樹形図としても書き表されるが、その目的は連鎖が構成素をなすことを示すことであった。

句構造規則の適用によって、右辺にはさらに書き換えの対象となる記号が導入されるが、これは「すべての有限状態言語は終端言語であるが、有限状態言語ではない終端言語が存在する」という定理によって、句構造規則の適用後にさらに次の句構造規則が適用できる記号が生成され得るためである。

変形規則

本書では変形操作は全てTという記号で表され、添え字によって変形規則の種類が弁別される。

本書の段階では、変形操作はそれがどのような連鎖に適用され、どのように連鎖を書き換え派生するかがそれぞれの例文によって表されている。それぞれの派生の始発は肯定能動文であるか、もしくは任意の変形が適用された出力結果である。しかしながら、正解の派生が何であるかが分かっているのが前提なので、変形の結果正しく構造が派生されてもそれは当然であり、キツネにつままれたような理解となる学習者がいるものと思われる。

本書の目的は、変形による派生が句構造規則による派生の限界を超えて派生前後の連鎖の繋がりを説明するための方法であり、決して言語学的考察から逸脱した手順ではないことの証明である。既に自然言語が有限状態ではないことは指摘されているので、句構造の決定にオートマトンを仮定することは出来ないことは述べられており、変形においても同様に機械的な手法によって連鎖を別の連鎖に自動的に書き変えることは出来ない。そのため、本書では変形という派生が存在することが示されるのみで、それが具体的にどのような操作かは伺い知れない。しかしながら、変形前の連鎖と変形後の構造記述を単純にするという目標は既に掲げられていて、後続の理論で精緻化されていく。当時の目玉であった割に記述に詳細を欠くが、それでも衝撃を持って受け入れられたのであるのだから、変形アプローチは当時としては革命的な構造の派生であったことは理解できる。

理論体系

本書の段階では、変形によって構造が派生した後、後続の理論のように構造が論理形式と音声形式に分かれて処理されるモデルはなく、派生された連鎖にチョムスキーが形態音素論と呼ぶ理論を適用して、音声的な実体に変える手順があるのみである。しかしながら、理論自体は変形操作によって構造を書き換える革命的なものであったが、理論それ自体は周到に考え抜かれており、統語構造の形式的記述とそれを説明できる最適で最小の理論の構築という目的からは、理論が如何に進化しても逸れることはなかった。

4. 結語

本書それのみで生成文法を完全に理解できるとは言わないが、その後の理論を、少なくとも Chomsky (1965) まで読み進めるには、本書は重要な文献であると評価する。チョムスキー革命も遠い昔の話となった今、本書は、生成文法が元々は何を求めて作られた理論であったかを思い出すためのものである。

3. ゴルダン・ドルニエイ (著) 米山朝二／関昭典 (訳) 『動機づけを高める英語指導ストラテジー 35』 (2005、大修館書店、207ページ、ISBN4-469-24508-9)

言語教育において動機づけは極めて重要である。このことは、授業中、目を輝かせ、熱心に言語活動に取り組んでいる生徒や、また、逆に、教科書も開かず、退屈そうな表情を浮かべる学習意欲の低い生徒を見れば、明らかであるが、言語学習の成功の鍵は如何にして学習者の動機づけを高めるかにあると言えよう。

動機づけは人間の心の最も根源的な部分に関わるもので、心理学において重要な研究領域の一つになっているが、英語教育に特化し、体系的に動機づけを扱った研究は殆どないのが現状である。本書

は、英語の学習や指導に焦点を絞り動機づけの諸相の解明を本格的に試みた最初の研究で、全部で5章から成り、様々な外国語学習理論や外国語教育経験を整理統合しながら動機づけのストラテジーを体系的に考察・提示している。

第1章(「動機づけについての予備知識」)では、大まかに言って、動機づけ理論に関する知見をベースに、言語学習を促進する動機づけの研究の視点・方向性が論じられている。まず、心理学と第2言語習得の両分野における様々な研究成果の紹介があり、前者に関しては期待価値論(成功の可能性と目標の誘因値が高いほど、肯定的動機づけも高くなること)等、また、後者に関してはドルニエイの1994年のモデル(協調性や競争性など集団に特有な要素が動機づけに関係していることなど)等が取り上げられている。これらの研究成果は丁寧に検討され、単一の理論では様々な要素が複雑に絡みあっている言語学習における動機づけの諸相を説明することはできず、全体像を捉えるためには別のアプローチが必要になってくるという結論が導き出されている。このような結論を踏まえ、次に、教室環境における「体系的で長続きするプラスの効果を実現するために、意識的に与えられる動機づけ」(p. 30)のストラテジーの研究方法として、「典型的な言語授業の「内部構造」に焦点をあて、様々な構造単位(新教材の提示やフィードバックのストラテジー、コミュニケーション活動の設定や宿題の課し方のストラテジーなど)に従って、ストラテジーを分類する」(ibid.)方法などが論じられている。

第2章(「動機づけのための基礎的な環境を作り出す」)は、具体的な形で動機づけストラテジーを論じた章である。動機づけストラテジーを円滑に行使するためには教室学習環境を整備する必要があるが、特に、1)適切な教師の行動と学習者との良好な関係、2)楽しい、支持的な教室の雰囲気、3)適切な集団規範を持った、結束的学習集団、を重要な条件と位置づけ、それぞれの中で有効であると考えられる動機づけストラテジーの考察を行っている。例えば、適切な集団規範に関するストラテジーに関しては、下記のような具体的ストラテジーが提示されている。

- ① 集団結成の始めに規範をはっきりと作るために、具体的な「集団の決まり」を考える活動を組み入れる。
- ② 教師が指定する規範の重要性と、その規範によって学習が向上することを説明し、生徒の同意を求める。
- ③ 生徒たちからさらなる決まりを引き出し、教師が提案した決まりと同様に話し合う。
- ④ 集団の決まり(および、それを破った場合の処置)を提示する。

(pp. 54-55)

第3章(「学習開始時に動機づけを喚起する」)は、教育現場の実状を踏まえ、決められた学習目標を如何に生徒に理解させ、教育活動を展開していくかを念頭におき、1)学習者の言語関連の価値観と好ましい態度の養成、2)学習の成功期待感の高揚、3)学習者に深い関連のある教材の提示、4)現実的な学習者信念の構築、の観点から様々な動機づけのストラテジーを論じている。例えば、学習者の言語関連の価値観と好ましい態度の養成に関しては、第2言語学習に内在する価値観、第2言語およびその使用者に関連した統合的価値観、道具的価値観に基づき考察が行われ、統合的価値観については下記のような動機づけストラテジーが提示されている。

- ① 外国語シラバスに社会文化的要素を組み入れる。
- ② 影響力の強い著名人の言語学習についての肯定的な見解を引用する。
- ③ L2社会を（インターネットなどを使って）自分で探索するように生徒に勧める。
- ④ L2使用者とL2文化財との触れ合いを多くする。

(p. 65)

言語学習のプロセスは複雑で、その習得には膨大な時間が必要であるが、習得段階に応じた動機づけがなされなければならない。第4章（「動機づけを維持し保護する」）は、第2章と第3章で考察された動機づけを維持・保護するストラテジーを論じたもので、1）学習者の自尊感情を守りながらの自信強化、2）学習者間の協力促進、3）学習者の自律性の育成、など全部で8つの領域において、動機づけのストラテジーを論じている。例えば、自信強化に関しては、成功経験、励まし、言語不安の軽減の観点から具体的なストラテジーが考察されており、言語不安の軽減については、下記のようなストラテジーが提示されている。

- ① 目立たない方法であっても社会的比較は避ける。
- ② 競争でなく協調を促進する。
- ③ 学習過程の一部として間違いをするという事実を学習者が受容するのを支援する。
- ④ テストや評価を完全に「透明な」ものにし、生徒との交渉も最終的な評点に加える。

(p. 112)

第5章（「学習経験を締めくくる：肯定的な自己評価を促進する」）では、学習者が自己の学習成果を肯定的に受けとめるための支援ストラテジーを、1）建設的な方法で過去の成功と失敗について学習者が説明できるように指導する方法、2）自己の成功と進歩により多くの満足感を学習者が得るための援助法、3）進行中の学習を最も促進することになるフィードバックの特徴、4）授業中に与えられる報酬と成績の効果（p. 141）の観点から考察を行っている。例えば、1）に関しては、能力がないと決めつけ、最初から諦めて努力を全くしない学習者などに言及しながら、次のような支援ストラテジーを提示している。

- ① 能力不足ではなく、努力と適切な学習方法の不足によって自分の失敗を説明するように学習者に勧める。
- ② 能力帰属の受け入れを拒み、教育課程は学習者の能力の範囲内にあることを強調する。

(p. 146)

本書は実用書で理論的考察は限られているが、外国語学習者に対して動機づけを行い、それを維持する方法・手法の提示における体系的には実に素晴らしい。外国語学習における動機づけが点でなく線として記述され、同時に、動機づけの複雑性が分かる書でもある。訳者補遺として、動機づけを高める英語指導の実践事例が載せてあるが、外国語学習における動機づけの重要性和奥深さを読み取ることができる。日々の指導に悩むことが多い英語教師の必読書である。

4. 『絶対役立つ教育心理学—実践の理論、理論を实践—』 藤田哲也編著 ミネルヴァ書房 2007年 p. 225 ISBN : 978-4-623-04886-1

本書は、教育心理学を教育の実践に活かすために、基礎的な研究知見の紹介にとどまらず、研究知見を実際の教育現場にいかすにはどうしたらいいかという視点で書かれたものである。教職を目指す学生はもちろんのこと、現職の先生方にも役立つ内容となっている。また本書は、加島・藤内・川島・江村（2013）で紹介した「絶対役立つ教養の心理学展開編—人生をさらに有意義に過ごすために—」（藤田，2013）と同じシリーズの書籍である。本書は、「教育心理学」についてより深く学びたい人に向けた内容となっている。

本書は、第0章から第13章の14章構成で、14名の著者による執筆となっている。以下に各章のタイトルを示す。

- 第0章 教育心理学について学ぶ意味—本書が意図すること
- 第1章 学習のメカニズム—条件づけとその応用
- 第2章 動機づけの基礎—やる気を心理学的に捉える
- 第3章 動機づけの応用—やる気を引き出し、持続させるには
- 第4章 記憶の分類—人間の記憶の多様性を考える
- 第5章 記憶の理論を活かす—効果的な「覚え方＝思い出し方」
- 第6章 学習方略—子どもの自律的な学習を目指して
- 第7章 メタ認知と学習観—学習を振り返り、コントロールする意義
- 第8章 発達の理論—発達を見つめる枠組み
- 第9章 乳・幼児期の発達—心の芽生え
- 第10章 社会性・道德性の発達—社会への適応
- 第11章 読解力の発達と教育—ことばを使いこなすために
- 第12章 青年期の発達—自己の形成
- 第13章 「障害」の理解—障害をもった人たちと、どう向き合うか

タイトルだけを見ても幅広い内容であることがわかると思われるが、本著では、特に「第0章教育心理学について学ぶ意味—本書が意図すること（藤田哲也）」と「第7章メタ認知と学習観—学習を振り返り、コントロールする意義（植木理恵）」について取り上げていきたい。

まず「第0章教育心理学について学ぶ意味—本書が意図すること（藤田哲也）」についてであるが、ここでは、教育現場と医学的な事例を紹介しながら、問題解決の際、経験だけに頼ることに対する危険性を指摘している。また藤田は、本書へ込められた意味を次のように述べている。

本書の副題「実践の理論、理論を实践」に込められた意味は、次の二つです。一つは「教育心理学の理論は、実践に活かすことができるからこそ、学ぶ価値がある」ということ。もう一つは、同時に、「たんに経験則を重視した実践では、偏ったり、大事なことを見落としかねないので、理論的な枠組みも知っておいた方が得策である」ということです（p. 4）。

藤田が示しているように、どうしても教員としての経験年数を重ねて行くと、経験的にわかることに頼ってしまいがちな場面もあると考えられる。そのため、本書は、あらためて理論的な枠組みを通して、実践を見直すことの重要性を示している。現職の先生方にとっては、日ごろの実践に対して「こういった理論的な枠組みがあったのか」といったような再発見につながると考えられる。

「第7章メタ認知と学習観—学習を振り返り、コントロールする意義（植木理恵）」では、メタ認知と学習観の重要性について述べている。第1節のメタ認知と学習では、「1-1 ボケとツッコミとメタ認知」から始まり、「1-2 メタ認知はなぜ必要か?」、「1-3 メタ認知の仕組み」、「1-4 メタ認知の効果」、「1-5 メタ認知の教育」と続き、日常の事例と研究の知見がバランスよく紹介されている。植木は、メタ認知について「メタ認知とは、『認知についての認知』つまり自分自身の認知過程について認知することを意味します (p. 103)」と定義し、メタ認知を学習場面で活用することの重要性を示している。

メタ認知が学習を改善したり、促進したりする効果として、植木は、カッツとボルコスキー (Kurz & Borkowski, 1987) の研究を紹介している。この研究では、小学校4年生から6年生の児童を対象として、文章の要約活動におけるメタ認知訓練の効果を検討している。児童を「文章要約訓練のみを行う群」と「文章要約の訓練に加えてメタ認知訓練を行う群」、「何も訓練を行わない統制群」の3つのグループに分けて、文章要約活動における成績を検討したところ、「文章要約の訓練に加えてメタ認知訓練を行う群」の成績が「文章要約訓練のみを行う群」よりも伸びていたことを示している。植木は、他にも研究知見を紹介しながら、「メタ認知を教育することが学業不振を改善するための突破口になる可能性がある (p. 106)」ことを示している。具体的には、「1-5 メタ認知の教育」の中で、学習者がメタ認知を使いこなすことができるようになるために、教師がモデルを示すことや、メタ認知知識を教えることの重要性も示されている。さらにメタ認知活動を活性化させるために、メタ認知活動チェックリストなどの活用も推奨している。

また、第2節の「学習観」においては、「2-1 学習観とは?」、「2-2 学習観、学習方略、メタ認知」の中で、学習観と学習方略との関連について述べている。植木は、学習観とは「学習に対する態度や信念」であり、「学習観は、その人が実際にどのような学習の仕方をするのかと関連があり、結果として、学力に影響を与える」と言及している。この項で、植木は自身の2002年の高校生を対象とした研究から、学習観は、「方略志向」、「学習量志向」、「環境志向」の3つに分けられることを示している。植木 (2002) において「方略志向」とは、「学習とは自分でその方法について試行錯誤し、あれこれと工夫しながら進めて行くもの」であり、「学習量志向」とは、「学習の量や時間を重んじ、反復練習によって学習は成立する」とされている。「環境志向」とは、「効果的な学習環境に身を置くことで、勉強はいつの間にか身についてくる」と定義している (植木, 2002)。さらに、学習者自身が持っている学習観によって、学習方略の用い方に違いがあることも示している。そのため、例えば「学習量志向」が強い学習者は、時間をかけて勉強したらいいという考えで、他の有効な学習方略を用いず、学習の効果が上がらないといったことがあると示唆している。さらに、「学習量志向」の強い教師の場合は、児童や生徒たちに対して、学習の量を多くすることを求めがちであるために、学習者の学習効率が悪い場合もあることを示唆している。これらのことから、植木は「学習者本人だけでなく、教師側も自らの学習観を見直し、メタ認知や学習方略の指導に習熟することが望ましいのです (p. 114)。」とまとめている。

この章で植木が述べているように、メタ認知や学習観については、教師自身の学習だけではなく、その教師が教える児童生徒の学習にも影響を及ぼすことを考えると、教師を志す者にとって、理解しておかなければならない重要な概念であると言える。

本書は、今回焦点を当てた以外の章も教育実践を行う上での有益な知見をたくさん提供している。本書を通して、自らの学習や生活について振り返り、教育実践に活用することができるため、教員を目指す学生だけでなく、現職の先生方にもぜひ読んでほしい1冊である。

引用文献

- 藤田哲也（編著）（2013）．絶対役立つ教養の心理学展開編—人生をさらに有意義に過ごすために— ミネルヴァ書房
- Kurz, B.E. & Borkowski, J.G. (1987). Development of strategic skill in impulsive and reflective children: A longitudinal study of metacognition. *Journal of Educational Child Psychology*, 43, 129-148.
- 加島 巧・藤内則光・川島浩勝・江村理奈（2013）．英語教師のための基本文献案内（2） 長崎外大論叢, 17, 203-212.
- 植木理恵（2002）．高校生の学習観の構造 教育心理学研究, 50, 301-303.